

1. 教育の責任

成人看護学慢性期では、慢性疾患を抱える成人期の人々が、生活する上でどのような看護が必要となるかについて教授している。成人は就労・家族・地域の中で多様な役割を有しており、疾患だけではなく、生活・社会背景に目を向ける必要がある。教育の責任としては、学生が疾患および、生活・社会背景に目を向けた看護の能力を培うことであるとする。

2. 教育の理念

国際看護学部の教育理念である多様性への理解と受容及び看護ができる看護教育の一翼を担っている。
入院患者に対し、入院している期間だけを捉えるのではなく、生活者としてとらえ、人々の社会的背景から個別性に配慮した看護について、学生とともに考えていく。

3. 教育の方法

講義では、臨床や国家試験で頻出する疾患をベースに、解剖や病態生理を知ることがどう看護に活かされるのか、既習の知識をどう看護に活かすか一連の流れとして理解できるよう構成した。また、学習している内容が実習でどう生かされるか想起できるよう工夫し説明した。さらに、講義に該当する看護師国家試験問題を掲載し、復習できるようにした。

成人看護学実習は、専門領域として初めての实習であり、基礎看護学実習を経ても精神的に不安定になる学生がみられる。学生の心身の変化に注意しサポートしながら、対象者の観察・ケアができるよう関わっている。
慢性疾患とともに生きる対象者が、どのような生活背景を抱えて現状に至ったのかをアセスメントできるよう、社会的背景や生活面に目を向けられるよう思考の整理の支援をした。また、成人期の ADL が自立した方への看護は、患者が自らの力を用いてセルフケアできるよう支援することが重要であり、アンドラゴジーの概念や教育的関りについて指導した。

4. 教育の成果

実習では、自宅に帰ってからどのように生活の再調整が必要かイメージする力が弱かった。しかし、臨地実習指導者と密に連携を取りながら、対象者に沿った看護の方向性を考えられるよう支援でき、主体性に進めることができていた。
講義は、一方的に説明する時間となりやすかったため、講義内で発問の時間をもうけ対応することで、主体的に学べるよう支援できた。

5. 改善への努力と今後の目標

コロナ感染症による Zoom での受け身の講義になれている学生にとって、臨地実習でコミュニケーションをとることに難しさを感じていた。最初の一步は教員がコミュニケーションモデルとなる姿を見せ、フィードバックすることで学びを深めてもらうよう支援する。
講義では、一方的に教員が話、学生が聞く、という姿になりやすい。学生が主体的に学ぶことができるよう、発問の時間を増やすなど、アクティブラーニングについて検討することが必要である。

【添付資料】

